



美術研修

2024年10月8日（火）～10月9日（水）
講師：美術研究家 沼辺 信一氏

長崎アート紀行

―西洋と東洋の交わるところ―

当財団では、かれこれ40年以上美術研修を実施していますが、今回は初の九州訪問です。古くから諸外国との外交や貿易で栄え、最先端の思想や文化、学問を求めて日本全国から人が集まっていた長崎を、美術研究家の沼辺信一先生と共にめぐりました。



平和公園



長崎県美術館



ダニエル・バスケス・ディアス
《人気闘牛士たち》
長崎県美術館所蔵
©VEGAP, Madrid & JASPAR, Tokyo, 2025 E5831



ライムンド・デ・マドラーン
《リュサンジュ公》
長崎県美術館所蔵



渡辺千尋《幻花I》
長崎県美術館所蔵



長い階段を上り、大浦天主堂へ



野口彌太郎《フレンチカンカン》
長崎市野口彌太郎記念美術館所蔵



野口彌太郎《那智の滝》
長崎市野口彌太郎記念美術館所蔵



解説をする沼辺先生



須加五々道《彩梢》
長崎市須加五々道美術館所蔵

晴天の下、美術館、平和公園、大浦天主堂などをめぐったのち、佐世保、九十九島まで足を延ばしました。車中ではガイドさんから被爆地の悲劇的な歴史を学び、実り多き二日間となりました。

長崎県美術館

長崎水辺の森公園に隣接し、「呼吸する美術館」をコンセプトとした未来的な建物です。運河を挟んで二つの棟に分かれ、風・光・水と緑に包まれた開放的な空間から、設計者である隈研吾氏の世界観が感じられます。

この美術館の最大の特徴は、東洋有数の規模を誇るスペイン美術コレクションです。第二次大戦中に特命全権公使としてスペインに赴任していた故・須磨彌吉郎の収集作品を中心に、17世紀の宗教画から20世紀のパブロ・ピカソやジョアン・ミロまで貴重なコレクションを見ることが出来ます。

当日は、長崎ゆかりのエンゲレーヴィング作家の企画展「生誕80年 渡辺千尋の銅版画」にて代表作の数々を鑑賞することができました。晩年の作品における「メゾチント」手法について、講師の沼辺先生より「銅版全体を刃物で傷つけて真っ黒な画面にしてから、図柄を白く削り出す手法」と

の説明がありました。その幻想的な作品の数々は、不思議なオーラを放っていました。

長崎市 野口彌太郎記念美術館

野口彌太郎（1899～1976）は30歳で渡欧し、ヨーロッパ絵画、特にスペイン系の絵画の中に東洋的精神を感じ、その作風に大きな影響を受けました。そして、独特の色彩感覚により日本のフォーヴィスムを確立した洋画家として知られます。

日本では「野獣派」とも言われるフォーヴィスムは、印象派に続いて20世紀初頭にパリで発表された新しい表現です。細部描写は徹底的に簡略化され、平面的ではっきりとした色彩と力強いタッチが特徴で、代表的な画家としてアンリ・マティスの名が挙げられます。

野口彌太郎は、ゆかりの地である長崎の風景をたびたびモチーフとし、生命力に溢れた作品で近代日本の洋画界に新風を吹き込みました。

長崎市 須加五々道美術館

長崎生まれの須加五々道（1913～2008）は、水墨画の技術に西洋の遠近法を融合させた「新日本画」と呼ばれる独特の画風を創造しました。ため息が出るほど繊細な風景画が、旧居留地の洋館にマッチした素敵な美術館でした。